

● シリーズ 私の見た日本 Vol.153

日本で気づいた「住まい」について

金 知恩(キム・ジウン)

韓国・ソウル生まれ。2008年4月～2012年3月宇都宮大学建設学科建築学コース(日韓共同理工系学部留学生プログラム)、2012年4月～2014年3月宇都宮大学大学院地球環境工学科地球環境デザイン学専門安森研究室、2014年4月～株式会社プランテック総合計画事務所 在職



1. 「家」についての記憶

記憶にある限り私にとっての最初の家は、外壁が赤レンガのごく普通の一戸建てで、その半地下階を借りた賃貸だった。家族4人で1DKの小さい空間を共有していたが、たった1つの大きな部屋一決して今は大きいはずのない一には私の大好きなピアノがコンクリートで固められた庭側に開く高窓の下にあった。母親が国語教室として使う屋間には少し大きめのテーブルが真ん中に置かれ、夜になるとテーブルの代わりに布団を敷いて4人が揃いおしゃべりしながら眠った。

小学3年生になる頃、片廊下タイプの高層マンションに引っ越した。3LDKの分譲マンション! しかも新築だったので、本物の「自分の部屋」ができたことだけでもすごく嬉しくて、引っ越す前から友達に毎日のように自慢したことをよく覚えている。たとえコンクリートの床とは言え、町の子どもが集まる宴会場(?)でもある「庭」が無くなったことはショックだったが、幸い角部屋だったので共用廊下を占領して遊ぶことができた。たまに友達の家に遊びに行くのだが、どの団地に行っても、広い狭いかの違い以外には驚く程同じ「一般的な」平面プランだった。

引っ越した町は、ただの高層マンションの集合体とも見える開発したての計画都市で、ほぼ団地によって町が区画されていたといっても過言ではなかった。小学校も中学校も高校も、高層マンションに囲まれた場所にあって、友達のほとんどが団地に住んでいた。私は日本に来る直前まで10年ほどこの町のこの家に暮らしていたのだが、同じ階にある全9戸の内、入れ替えが無かったのは私の家族しかいなかった。それから4年後は私の実家もさらに新しい計画都市に引っ越している。

2. 日本の「町」と言うと

日本に来てから、しばらくは大学がある栃木県の宇都宮市に住んでいた。中心市街地には大きな神社があったり商店街があって比較的賑わっていたが、家の周りは所々田んぼがあったり、地域商圏を握る大きいショッピングモールがあって、一戸建てとアパートがぼちぼちある、典型的な地方都市だった。

住宅街を歩いていると、今まで私が見てきた「家」と「町」とはかなり違った風景だったので、暇があれば散歩をするようになった。別の時期に建てられた住宅が各々の形をして並び、スケールもほんの少しずつずれている。敷地内に収まりきれない物が道の脇に顔を出していたりする。

古そうな家程、まるでトランスフォーマーのように色々な装置(?)が本体に付着されていたりして、家主と家が共有した時間の流れが感じられた。一方、本体から何かを切断したような痕跡がある家も簡単に見つけられたが、「減築」という考え方が世の中に存在するということを知ったのはこの時だった。形を変える家、そしてその家を作る町並み。生きているような家と町に気づくことは新鮮な体験だった。

日本に来る前までは日本の「町」といったら、古い町並みが綺麗に保存されている京都、あるいは首都の東京を取り上げていたのだが、今はとてもとても平凡な、宇都宮を思い浮かべる。

3. 住まいとは—その1

日本の民家と韓国の民家は、とても似ているように見えるのだが、その成立ちから見る空間構成の特性には大きい違いがあると考える。

韓国の民家は、庭でさまざまな社会的活動が行われるため、庭向きに開くマル(木の

板をはった反外部空間)があり、さらに庭を介して外に開く開放的な構成となっている。現存するほとんどの民家は平屋で、平面構成、屋根の形や素材…その種類と形式は一般的に気候に起因する。

それに比べ、日本の民家(住居部において)は内向きに開く傾向にある。住まいをプライベートの空間として認識する度合いが高いとも言えよう。気候に起因した形式が存在することは日本も同じだが、1つ不思議に思う点がある。日本の「町家」「舟屋」のように、空間構成において住まい方に起因する形式は、韓国にはなぜか存在しない。

4. 住まいとは—その2

戦後、経済成長のためさまざまな政策を実施していた韓国は、韓国とは住まい方が異なった海外の住まいを取り急ぎ輸入してきて量産した。その結果、確かに速いスピードで町の形を形成することは可能だったが、住まいのバリエーションが少なく、どこも似たような風景になってしまった。それに比べ日本の場合は、同じく海外の住まいを取り入れたものの、自国の状況に合わせた住まい方を考察しながら、今までも蓄積してきているように感じる。地震や台風等自然災害から生き残るための丈夫な「建物」を建てる技術は当たり前で、さらに、住まいという「環境」のあるべき姿についての追求。

いよいよ建築家の存在価値が問われるようになった今日にも、日本の建築家は日本の状況と生活に適切な「住まい」を考え、「住まい方」を考え、町を、社会を、国を考える。彼らにおいて住まい(=住まい方)とは社会を見るツールであるし、社会を作り上げるツールである。

5. 震災と住まい、そして住まいのある町

3.11東日本大震災の時、宇都宮で当時住んでいた築30年RC造の賃貸アパートが震度5強にも全く壊れず耐えてくれたことを心から感謝しながら、学生である私たちに何ができるか悩む日々を過ごした。実家が被災地であって家が流れてしまった友達もいたし、福島原発から半径30km程の場所に実家があって常に家族や地元の心配をしている友達もいた。近くの小学校には他の県から避難してきた住民のための避難所が設置された。

4年前の地震は日本に考えられない程の被害を及ぼしたし、数えられない程の「誰かの居場所」を奪ってしまった。今もまだ復興事業が続いている状況だが、地震や津波により何もかもが失われた当時の風景は私が今まで受けたことのない衝撃だった。

しかしその町に、だから「地元に残る」とい

う人々が居るとい話をもっと驚きであった。皆各々複雑な事情はあっただろう。中には残りたいたいではなく、残らざるを得なかった人も居るかもしれない。しかし、震災があったからこそ被災地に戻った人々もいることを見ながら、このような地元愛、住まいのある町(あるいは「有った町」)に対しての愛着心は現代の韓国では(少なくとも私が育った環境では)、芽生えにくい感情であることと思う。その時の状況に合うもっと便利な場所に、たまには金銭的価値が上がりそうな物件を狙って、移る。住まいのある町に対するこの感覚の違いは、何から来るのだろうか。

6. 住まいを考える

無関係そうな話を長々と壮大な感じで広げながら語ってしまったが、話したい要点は、この資本主義社会下では薄れてしまいがちだ

が、「家=住まい」は単なる資産それ以上の意味があるということだ。

日本と韓国。両国の普遍的な住まいは、国民性・面積・人口・地理的条件・・・、さまざまな理由で異ならざるを得ないが、近年、地域過疎化・高齢・少子化等の社会的問題を共に抱えている状況である中、共通の課題をどうすれば解決できるか真剣に考えていかなければならないし、韓国に限ると、住まいが投機的手段になってしまう風潮を避けるため、国家的な次元で市場の根本的な構造を監視する必要がある。

理想的な住まいとは、住まい方が、そして住まいがつくる町が見えてくるようなものだと私は考える。日々変化していく社会事情を直視し、住まいと町のあり得る姿、あるべき姿から、我々にできる建築的答えを常に考えていきたいと思う。



韓国で住んでいた町。高層マンション団地が数多く並び



韓国の民家。中央に反外部空間のマルを置き、庭に開く



近所の小学校にあった避難所。研究室でパーティションを作るボランティアを行った



宇都宮の町並み